



慶應義塾大学ビジネス・スクール

キューバ・ミサイル危機

5

1962年10月16日、火曜日の朝のことであった。午前9時をいくらか過ぎたころ、ケネディ大統領から弟のロバート・ケネディ司法長官に電話があり、ホワイトハウスに来てもらいたいと言った。彼は、大きな危機に直面していると言っただけだった。それから間もなくしてホワイトハウスに来たロバート・ケネディに、大統領は、U2型機が写真偵察飛行を終え、米情報当局はソ連がキューバにミサイルと原子兵器を配置していることを確信するにいたった、と語った。

これがキューバ・ミサイル危機——世界を核による破滅と人類滅亡の奈落に追いこむ米ソ両核大国対決のはじまりだった。

16日午前11時46分、閣議室で、米政府高官多数に対して、CIA（中央情報局）から正式の事情説明が行われた。写真が提示された。地図と指示棒を手にあらわれた専門家たちは、写真を注意深く見ればキューバのサンクリストバル近くの原野にミサイル基地の建設が進行中だということがわかるだろうと述べた。

驚きのあまり呆然——というのが会議の支配的空気だった。ソ連がキューバに地対地弾道弾を展開させようとは、だれも予想してはいなかった。

これより数週間前、ロバート・ケネディはソ連のアナトリ・ドブルイニン駐米大使と会っていた。彼は、もし米国が地下核爆発実験について、ある程度の取り決めを行うことができるなら、ソ連は大気圏内核実験禁止条約に調印する用意があると伝えにきたのであった。ロバート・ケネディは、彼のメッセージと付属文書をケネディ大統領に伝えると約束するとともに、米政府部門でわれわれはキューバに送られている軍事装備の量について深刻な懸念を抱いている旨を話した。

本ケースは次の資料から引用しつつ高木晴夫によって1991年に作成された。

「ケネディ 栄光と苦悩の一千日」（原書名：A Thousand Days）

Arthur M. Schlesinger, Jr. 著 中屋健一訳 河出書房刊

「ロバート・ケネディ 13日間 キューバ・ミサイル危機回顧録」

（原書名：Thirteen Days ; A Memoir of The Cuban Missile Crisis）

Robert Kennedy 著 毎日新聞社外報部訳 每日新聞社刊

「ケネディの道」（原書名：Kennedy）

Theodore C. Sorenson 著 大前正臣訳 サイマル出版会刊

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話045-564-2444、e-mail:case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は<http://www.kbs.keio.ac.jp/>へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

10

15

20

25

30

sample

sample

sample

sample

sample

すでにホワイトハウスには、ソ連が地対空ミサイル（SAM）基地を建設しているほか、漁村と見せかけて大きな海軍造船所と潜水艦基地をつくっていることを示す証拠がとどいていた。この点については、制約下にありながらも軍事力増強にしばしば重要な情報を送ってくるキューバ内の工作員や、米フロリダ州に到着するとともにふるいにかけられたキューバ人避難民に対する尋問、さらには、U2型機の偵察飛行を通じて、慎重な監視の目を光させていた。

この時期はちょうど中間選挙にも当たっていた。秋にはいって、9月、10月には連日非難と応酬が繰り返されていた。

「警戒をもって見守る」共和党は、米国は自国の安全を守るに必要な措置をとっていないと主張していた。ホーマー・ケープハート上院議員（インジアナ州選出）ら一部の人々は、米政府が10 キューバに対し軍事行動をとることを暗に要求していた。

ドブリイニン大使に対し、ロバート・ケネディは、ケネディ大統領が事態を深く懸念している、と伝えた。彼は、心配は無用である、なぜならキューバに地対地ミサイルあるいは攻撃用兵器を配置することはない旨をケネディ大統領に保証せよとのフルシチョフ・ソ連首相の訓令をうけているからだ、と語った。さらに彼は、この軍事力増強がなんら重要性を持つものではないことを、そして、フルシチョフ首相は選挙前のこの時期に米ソ両国関係を破壊するようなことはしないことをロバート・ケネディからケネディ大統領に伝えて安心させるとよいと述べた。フルシチョフ首相はケネディ大統領が好きなので、彼を困らせるようなことはしたくないと思っている、とも言った。

ロバート・ケネディは、フルシチョフ首相の愛情表現方法はきわめて奇妙である、つまり、キューバでソ連がしていることは米国にとって最も深刻な関心事であり、フルシチョフ首相が友好の意思を示したとしても、カリブ海での軍事活動に徹してみれば、なんの意味もない、と指摘した。

「われわれは軍事力増強を注意深く見守っている。もしソ連がキューバにミサイルを配置したら、きわめて重大な結果を招くであろうことをはっきり認識してほしい」とロバート・ケネディは言った。彼は「そんなことは決して起こらないでしょう」と約束して去った。

25 同じころ、モスクワから帰任して来たソ連大使館の重要な地位にある一館員が、フルシチョフからケネディ大統領にあてられた親筆の書簡をロバート・ケネディのところに持てて来た。書簡の中でフルシチョフは、どんな状況の下でも地対地ミサイルがキューバに送られることはないと大統領に保証したい、と述べていた。

10月16日火曜日の朝、CIA係官がU2型機の撮影した写真について説明したように、いまや30 すべてがウソ、それも架空に組み立てあげられた巨大なウソのカタマリだったことがわかった。

ソ連は、キューバにミサイルを配置しつつあった。そして彼らは、ミサイルをキューバに輸送し、基地の建設を始めていた。しかも一方ではフルシチョフ首相からケネディ大統領にさまざま

な形での私約、公的な保証が送られて来ていた。

このような状況であるから、驚きと不信の気持ちがみんなの中にありありとみえていた。フルシチョフにだまされていたのである。しかし米政府のだれ一人として、ケネディ大統領にソ連のキューバでの軍事力増強にはミサイルが含まれようとほのめかすことすらしたものはいなかつた。5

大統領は何度となく、キューバでのソ連の軍事力増強は米国にどういう意味合いを持つと感じるかについて、情報当局が特にこまかく吟味してみるよう要求していた。その情報当局は、将来の事態の動きを国家的な立場から推定、検討した中で、大統領に、ソ連は、キューバに攻撃用兵器を持ち込むことはあるまいとの意見を上申していた。——この意見は、情報当局が1962年にキューバおよびカリブ海についての公式報告を大統領に提出した四回の報告の中で、毎回とも述べられていた。9月19日の日付の報告では、米国情報委員会は突っ込んだ協議と検討を重ねた後、ソ連はキューバを戦略基地にしないだろうとの結論に何らの留保条件なく達した、との意見が明らかにされていた。この意見には、ソ連がこれまでどの衛星諸国にもこの種の措置をとったことがないこと、この場合、米国からの報復を考えようが、ソ連がその危険を冒すにはあまりにも危険が大きすぎると感じるだろう、ということが指摘されていた。10

後になって事後の検討のさい、キューバ内のスパイから、1962年9月にミサイルがあることを示唆するいろいろな報告は来ていたことが明らかになった。しかし、これらの報告の大部分は間違っていた。一部の報告は訓練を受けていない目撃者が地対空ミサイルと地対地ミサイルを混同した結果だった。しかしいくつかの報告は正確であったことが明らかになった。その1つはハバナのヒルトン・ホテルの元雇人から来た。彼は、ミサイルの据えつけがサンクリストバルの近くで行われていると信じていた。またもう1つの報告はフィデル・カストロ首相の飛行士が、ある夜、酔って自慢げにソ連はキューバに核ミサイルを配備しようとしていると話しているのを、盗み聞きした者の報告だった。15

これらの報告は、内容があると判断されるまでにはくり返し、くり返し点検にかけられる必要があつたし、大統領や他の政府高官の手元に回されるに十分な内容があるとは考えられもしなかつた。20

あの最初の朝、閣議室で会合した同じグループは、その後十二日間ぶつ通しでほとんど絶え間なく会合し、その後も6週間ほど連日会議を開いた。このグループ——それは後で“エクス・コム”(Executive Committee of the National Security Council=国家安全保障会議執行委員会)と呼ばれることになったが——には次の人々が含まれていた。25

国務長官ディーン・ラスク、国防長官ロバート・マクナマラ、中央情報局(CIA)長官ジョン・マッコーン、財務長官ダグラス・ジロン、司法長官ロバート・ケネディ、国家安全保障問題について

sample sample sample sample

のケネディ大統領の顧問マクジョージ・バンディ、大統領顧問セオドア・C・ソレンセン、国務次官ジョージ・ボール、国務次官代理U・アレクシス・ジョンソン、統合参謀本部議長マックスウェル・テーラー大将、中南米担当国務次官補エドワード・マーチン、ソ連問題顧問リュウェリン・トンプソン（最初はチャールズ・ボーレンだったが、彼は第一回の後、駐仏大使となって去り、その後をトンプソンが継いだ）、国防次官ロズウェル・ギルバトリック、国防次官補ポール・ニッツ。そして時折り、いろいろな会合に副大統領リンドン・B・ジョンソン、国連大使アドレイ・スチブンソン、大統領特別補佐官ケネス・オドンネル、米海外情報局次長ドナルド・ウィルソンらが顔を見せていた。以上があの重大な危機の期間に会合し、話し合い、議論し、いっしょになつて戦ったグループである。このグループから勧告が出され、ケネディ大統領はその勧告から最終的に自分がとるべき行動を選ぶのだった。

彼らは最高度の知性と勤勉さと勇気を持ち、一身をあげて国の幸福にささげている人たちであった。だれ一人、最初から最後まで自説に固執した者はいなかったともいふことも、彼らにとつてなんら不名誉なことではない。開放的で、とらわれない精神といったものが絶対に必要だった。同じひとつの考え方の変種程度に、すこし意見を変えただけの人も一部にはいるにはいた。他の人々たちはその日によって次々に意見を変えた。なかには事実の圧力に押されて判断力と安定性を失ったかのように見えたものもあった。

当初の一般的な空気は、なんらかの形の行動が必要とされている、といったことだった。ほんの少数意見だったとはいえ、ミサイルの力の均衡を変えるものではなく、したがってなんら行動を必要としていないと考えたものすらいた。その段階において大部分のものは、ミサイル基地に対する空からの爆撃が唯一の道だろうと考えていた。いろんな提案に耳を傾けながら、ロバート・ケネディーは大統領に走り書きを手渡した。

「真珠湾攻撃を計画したときのトージョー（東条英機元首相）がどう考えたかが、やっとわかつてきたよ」

事態は困難である。賭金は高い——とてつもなく高く、そして最も本質的な種類のものである。しかし、大統領は行動しなければならないことを自覚していた。米国はソ連の行為を容認することはできない。さりとてどのような行動をとるかは、まだこれから決定しなければならない。しかし彼は、当初から、なにかをしなければならないだろうと確信していた。

議論を押さえることのないように、また特別気を使われるようなことを好まなかつたために、大統領は、グループの委員会のすべての会議に顔を出さないと決めた。これは賢明だった。大統領が出席しているときには、それぞれの人柄が変わり、強い個性の人物ですら、大統領に耳ざわりがよいと思われる土台の上に勧告を組み立てることもしばしばあった。彼は、行動について

sample

sample

sample

sample

sample

は一つのコースでもよいし、あるいは、おそらく選択が可能ないいくつかのコースについてでも、進んで勧告を出すようグループに指示した。

グループが、隔離あるいは海上封鎖のアイデアを討論し始めたのは、第一日の火曜日、16日の昼と夕刻だった。水曜日（17日）にはマクナマラ長官は海上封鎖の最も強い主唱者となっていた。

5

同長官は、それは限定的な圧力で状況が許すのに応じて増大させていくことができるのだ、と論じた。さらに、それは劇的で強烈な圧力で、しかも最も重要なことはやがて理解されるだろうが、われわれに事態をコントロールできる余地を残しておくものもあるとも述べた。その後、同長官はミサイル基地だけに対する空からの奇襲攻撃——それは”外科的空爆”と呼ばれるようになつたが——は統合参謀本部の見解によると軍事的に役に立たないこと、またこうした軍事行動はキューバの全軍事施設を対象にしなければならなくなり、やがて進攻作戦にまで発展するだろう、と報告することによって、さらに立場を強めた。

10

「多分そこまで行きつくだろう。おそらくそうした一連の行動が避け得ないものであるとわかってくるだろう」と彼は論じた。しかし、もしかひょっとすると、キューバとの、そしてその結果、必然的にソ連との、そういう形での対決がまだ回避できるかもしれないのだとすれば、「そうしたコースからスタートしないでおこう。」彼はこう主張した。

15

封鎖のかわりに武力攻撃を主張した人たちは、封鎖は事実上ミサイルを撤去させ得ないだろうし、ミサイル基地で進められている作業をストップさせることすらできないだろうと指摘した。ミサイルはすでにキューバ内にあるのだ。そしてわれわれが封鎖でしようとしているのはすべて“馬小屋から馬が飛び出したあとで小屋のドアを閉める”ことになるだろう。さらに……と彼らは主張した。「われわれがキューバとカストロに全力を集中しなければならないこの際に、ソ連船を停船させることによってソ連との対決を持ち込むことにもなるだろう。」

20

彼らの議論で最も説得力があったのは、キューバ周辺で封鎖を実施すれば、ソ連は同様の手をベルリンに対して打ってくるだろうということだった。もし封鎖をとく代価としてキューバからのミサイル撤去を要求すれば、ソ連は相互措置としてソ連周辺からミサイルを取り除くことを求めてくるだろうという議論であった。

25

このようにグループは論じ合い、またこのようにして意見を異にした。すべて献身的で知性ある人たちだが、祖国の、ひいては人類の将来をめぐってカンカンガクガクとやり合つたのである。そうこうしている間に、時間はゆっくりと走り抜けていった。

10月17日、水曜日に撮影された写真を調べると、他にも数カ所の基地があり、射程1000マイル(1600キロ)以上のミサイルを少なくとも16基、おそらくは32基を持っていることがわかつた。軍事専門家は、これらのミサイルは1週間以内にも実際に使用可能になるだろう、との意

30

見を述べた。翌18日、木曜日、われわれの情報部門は、キューバに持ち込まれたミサイルはソ連全体が現有する ICBM（大陸間弾道弾）能力の約2分の1にあたる核弾頭を装備し得るものだと推定した。写真はミサイルが米国のいくつかの都市に向かられていることを示しており、それらが発射されると数分を経ずして8000万人の米国人が死ぬだろうと見積もられた。

5 統合参謀本部のメンバーは、一致して即時軍事行動にはいることを要求した。彼らは、海上封鎖は効果が期待できないとの見解を強力に表明した。カーチス・ルメー空軍参謀総長は、大統領に対して、武力攻撃が絶対必要だと強く迫った。大統領が、ソ連がどう対応してくるかとただしだとき、ルメー将軍は何も反応しないだろうと保証した。ケネディ大統領は納得しなかった。

10 「ソ連もわれわれ同様、手をこまねいてこうした事態を見送ることはあるまい。むざむざとわれわれに彼らのミサイルを取り除かせ、多数のロシア人を殺すことを許して、しかも何も手出しをしないといったことは、彼らのすべての声明からみても出来ないことだ。たとえキューバではなにもしないとしても、ベルリンではきっとやってくる」

15 大統領は語り続けた。さらに多くのミサイルがキューバに持ち込まれてくる危険があり、もしわれわれがなにもしないとすれば、ソ連は米国を完全に無能力だと考えて、ベルリンやその他世界各地で動きはじめることもありそうだという統合参謀本部の主張が正しいことは自分も認め15。その時になってキューバでなにかをしてもそれは遅きに失する。というのはすでにソ連製ミサイルはすべて実用可能になっているからだ。

海兵司令官のデイビット・M・シャウブ将軍が、みんなの気持ちを要約した。「ミスター・プレジデント、進退まさにきわまれり、ですな」

20 大統領はすぐに答えて、「あなたと一緒にですよ。」みんな笑いだし、会議は最終的決定にいたらず散会した。

その後、マクナマラ長官は大統領に対し、自分は統合参謀本部と意見が違い、キューバ攻撃よりも封鎖に賛成だと述べながらも、攻撃に必要な飛行機、兵員、および弾薬の準備は展開されつつあり、もし決定がくだるならば10月23日の火曜日から必要な爆撃を行う態勢にはいれる、25と報告した。計画によると、第一撃は延べ500機が出動、ミサイル基地、飛行場、港湾、砲兵陣地など、すべての軍事目標を攻撃することになっていた。

30 ロバート・ケネディは、マクナマラ長官を支持して封鎖に賛成した。そうすればうまくゆくと深く確信したからではなく、封鎖の方が武力攻撃よりも柔軟性に富み、不利が少ないと感じたからである。何よりも重要なことは、他の人々と同様、私も米国がキューバを奇襲して爆弾の雨を降らせ、何千という一般市民を殺すという考えを受け入れることができなかつたのである。ほかの案もみな恐らくは、そう味のよいものではなかつたろう。祖国のそんな行動路線をわれわれが認めるなど、とうてい考えられなかつたのである。

10月18日の夜までに、グループの多数意見は封鎖支持に固まったように見えた。その夜、9時15分頃、グループは国務省からホワイトハウスにおもむいた。リムジンの長い行列をつくって不審を招くのを避けるため、みんながロバート・ケネディの車に乗った。ジョン・マッコーン(CIA長官)、マックスウェル・テーラー(統合参謀本部議長)、運転手、それにロバート・ケネディが前の座席にスシ詰めとなり、残りの六人が後ろの座席にすわったのである。

5

グループは大統領に勧告内容を説明した。最初のうちは会合は秩序正しく、満足すべき進行ぶりをみせていた。しかし、みんなが話すにつれ、大統領が突っ込んだ質問をするにつれて、みんなの気持ちと意見が再び変わりはじめ、それは小さな問題だけにとどまらなかった。何人かは、極端から極端へ考えが変わった。——会合のはじめには空襲を支持していたのが、ホワイトハウスを出るころには、どんな行動もいっさい支持しなくなっていたのである。

10

大統領は全く不満足で、帰って協議を続けるようグループに命じた。そして大統領自身は通常の日程にもどり、選挙遊説を続けた。他になにか変わったことをすれば不審を招くだろうからである。

翌朝、グループは国務省で会合したが、再び鋭い意見の対立が起こった。緊張し、何時間も眠らずに過ごしたことが響きはじめていたのである。

15

最後にグループは、大統領に対して理性的な勧告を、封鎖と空襲に関するいくつか行えそうな手続きに同意した。時間がなくなりつつあり、遅延はできないと承知していた。グループはサブ・グループに分かれて、それぞれの勧告を起草しあげた。それは大統領の全国民に対する演説の概要にはじまり、その後とるべき行動路線のすべてを記述し、起こり得るべきすべての非常事態を予測して、それぞれの場合にどう対処するかを勧告するものであった。

20

その昼下がり、サブ・グループごとの勧告案を交換し、互いに相手のサブ・グループの案を精密に吟味し、批判した。それから案文は起草したサブ・グループの手もとに戻され、さらに進んだ解答へと発展させられたのである。

これらすべてから、段々と最終的な諸計画の輪郭が浮かび上がって来た。それは、封鎖を提唱したサブ・グループにとっての、封鎖の法的基礎、米州機構の会議のための議題、国連の役割についての勧告、船舶を停船させるための軍事的手続き、そして最後は軍事力が使用され得る状況についての概略であった。

25

即時軍事行動を唱えたサブ・グループにとっては、それは、攻撃地域、国連でわれわれの立場をいかに防衛するか、中南米諸国からどのようにして支持を取り付けるかについての提案、さらにフルシチョフに対してカリブ海、ベルリンその他世界の地域で米国に対抗して軍事的に動くことがいかにトクにならないかを確信させようという提案にもとづいた書簡のあら筋だった。

30

こういった検討を重ねた間中、グループのメンバーはみんな対等の立場で発言した。資格の隔

たりはなかった。事実、議長すらいなかつた。ディーン・ラスクは国務長官として議長の立場のあつたようだが、この期間、他の仕事に追われ、グループの会合に出席できないことがしばしばだつた。

このため、マクナマラ、バンディ、ボールらが積極的に奨励して、発言は全く自由かつ無制限
5 だつた。みんな平等に発言の機会が与えられ、その発言は直接、みんなの耳にはいった。これは途方もなく大きな利益をもたらすやり方だつた。階級が非常に重要になることの多い行政府内では、あまり見られないものだつた。

グループは 19 日とその夜、終日会議を開いた。それからまた 20 日の朝早く、国務省にもどつ
10 ていた。

ロバート・ケネディは 19 日に、大統領と数度話し合つた。大統領はどういう行動をとるかについて決定するため十分な時間的余裕のあるうちにグループと会合し、それから 21 日の日曜日の夜、全国民に放送できたらと希望していた。20 日の朝 10 時にはロバート・ケネディはシカゴにいる大統領に電話し、グループは大統領に会えると告げた。

15 大統領がワシントンへの帰途にあるとき、世界各地の米軍は警戒態勢に置かれた。大統領が空襲の勧告を受け入れようと決めた場合に備えて、マクナマラ長官は国務省でのグループの会議の席から電話し、戦術空軍四個中隊の出撃準備完了を命じた。

10月20日午後1時40分、大統領はホワイトハウスに帰り、ひと泳ぎした後、午後2時半、歩いてオーバル・ルームへ行った。

20 会議は5時10分すぎまで続いた。国家安全保障会議の正式会議として招集されたので、集まつた人数も多く、それまでの討議に参加していない人たちもいた。ボブ・マクナマラが封鎖論を述べ、他の人々が武力攻撃論を述べた。

大統領はその午後、封鎖支持の決断をくだした。翌朝、ダメ押しの会議が、戦術空軍司令官のウォルター・C・スヴィニー・ジュニア将軍との間に行われた。将軍は大統領に対し、大規模
25 な奇襲爆撃をやつたとしてもキューバにあるすべてのミサイル基地と核兵器を確実に破壊できるとはいえない、と語ったのである。大統領の心中にまだ残っていたかもしれない小さな、去りやらぬ疑念に、これでケリがついた。大統領は封鎖ではミサイルを除去できないだろうと心配していたが、いまや攻撃によつても、ミサイル除去の目的は完全には達成できなことが明らかとなつたのである。

30 全面武力攻撃に反対する最も強力で、しかもだれも満足な解答を与えることができなかつた議論は、奇襲攻撃は米国の全世界における道徳的立場を、破壊せぬまでも掘りくずすであろう、というものであつた。

10月20日土曜日の午後の会議には、アドレイ・スチブンソン（国連大使）がニューヨークからやってきて参加した。彼はすでに何回かエクス・コム（国家安全保障会議執行委員会）の会議に出席していたのである。スチブンソンは空襲については一貫して懐疑的だったが、土曜日の会議では、次の点を強く主張した。すなわち、ソ連がキューバからミサイルを引き揚げるなら、われわれもトルコとイタリアからミサイルを引き揚げ、グアンタナモ湾の（キューバ内にある）海軍基地を放棄するつもりであると、ソ連に明示すべきだ、というのである。

この提案に出席者の一部はきわめて強く反発し、鋭いやりとりが何回か交わされた。大統領はスチブンソン提案を拒否したが、自分もずっと前からトルコとイタリアにあるジュピター・ミサイル（液体燃料 IRBM）については気がかりな点があり、しばらく前に国務省に対してこれらのミサイルの撤去を交渉するよう要請している、と語った。しかしいま撤去を提案するのは適当ではない。また米国はグアンタナモ湾をソ連の脅迫のもとに放棄することはできない、と大統領は述べた。

大統領の演説予定は10月22日月曜の夜と決まった。ジョージ・ボール（国務次官）、アレクシス・ジョンソン（国務次官代理）、エド・マーチン（中南米担当国務次官補）の指揮で、1時間きざみの詳細な予定表が組まれた。同盟国への通告、OAS（米州機構）会議の準備、ワシントン駐在大使らへの通告、そして各国大使やその他の人々のために米国の行動が正当な法的根拠に基づいていることを示す文書の用意——。

呼び出されて討議に参加する政府高官はつぎつぎにふえ、重大危機切迫のニュースがついに報道機関にもれはじめた。大統領が自らいくつかの新聞社とかけ合った結果、月曜日の朝刊に書かれた記事は、大統領が重要演説を行う予定であるという報道と、米国は重大な危機に直面しているという報道だけであった。

これと同じ時期に、軍事上の準備も進められた。ミサイル要員は最大限の警戒配備について。軍隊がフロリダ州はじめ米国南東部へ移動した。10月20日の夜おそらく、第一機甲師団がテキサス州からジョージア州へ移動しはじめ、さらに5個師団が警戒体制に置かれた。グアンタナモ湾の基地は強化された。

海軍はカリブ海に180隻を展開させた。戦略空軍は攻撃された場合の被害を軽減するため、全米各地の民間着陸場へ散開した。B52爆撃機隊は核兵器を満載して飛ぶように命令された。1機が着陸すると、入れ替わりに他の1機が直ちに配置につくのであった。

大統領の演説の1時間前、ラスク長官はドブルイニン大使を呼び演説について伝えた。新聞は、ドブルイニンがかなり動揺してラスク長官のオフィスを去った、と報道した。

その22日の午後、演説に先立ち、そして夫人と昼食をすませてから、大統領はいくつかの会議を開いた。第一の会議で彼は、グループを——それまでは「ザ・グループ」とか「ウォー・

5

10

15

20

25

30

カウンシル）（作戦会議）とか呼ばれていたが——国家安全保障会議の行動メモランダム第196号により「現下の危機において行政部の作業の有効な実施を期するため」国家安全保障会議執行委員会として正式に構成した。大統領が委員長となり、グループは迫って指示あるまで毎朝10時に大統領と会うことになった。

5 そのすぐあとで大統領は閣議を開き、閣僚たちにはじめて危機について告げた。それから、放送までもうあまり時間がないころ、議会の指導者たちと会談した。これが一番むずかしい会議であった。

議会指導者の多くは、鋭く批判した。大統領は武力攻撃か進攻といったもっと強力な行動に出るべきであり、封鎖では対応策としてあまりにも弱すぎる、と感じたのである。

10 ジョージア州選出のリチャード・B・ラッセル上院議員は、大統領が考えているよりも、もつと力強く行動することがどんなに重要か、できる限りの強い言葉で強調したい、そうしなければ自分自身を許せないだろう、と述べた。アーカンソー州のJ・ウィリアム・フルブライト上院議員も、封鎖などという弱い手段よりも軍事行動をとるよう、強く忠告した。他の人々は——われわれは懐疑的だが公には沈黙を守るつもりだ。それというのも、いまが祖国にとってかくも危険な時だからにほかならない——と述べた。

20 大統領は、しばしば感情的となる批判の声に耳を傾けたのち、彼としては合衆国の安全を守るのに必要ないかなる措置もとるつもりだが、最初からこれ以上の軍事行動に出る正当な理由があるとは思わない、と説明した。この問題を破壊的な戦争なしに解決できる可能性があるから、自分はいま説明した方針を決定したのだ。恐らく最後には、直接軍事行動が必要となることだろうが、その道を軽々しくたどってはならない、と彼は述べた。さしあたって自分は、われわれの軍隊を有事即応の態勢におき、行動配置につける措置をとった、と議員たちに保証した。

25 10月22日の議会指導者たちとの会談で、ケネディ大統領はこれらの指導者に、いったん攻撃をはじめれば、相手側はミサイルの一斉発射で対抗することができ、何百万という米国民が殺されるだろうことを思い起こさせたのだった。それは賭けであり、自分は他のすべての可能性を最終的に、そして徹底的に検討し尽くさないいうちはこの賭けに乗り出すつもりはない。これはきわめて冒険的な計画であり、そのはらむ危険を誰もが理解しなければならない、と彼は語ったのである。

この会合が終わるころには、大統領は興奮し、いらいらしていた。

30 22日午後7時、大統領はテレビを通じて全国民に放送し、キューバ情勢とキューバを封鎖隔離する理由を説明した。彼は落ち着いており、正しい方針を選んだと確信していた。

sample

sample

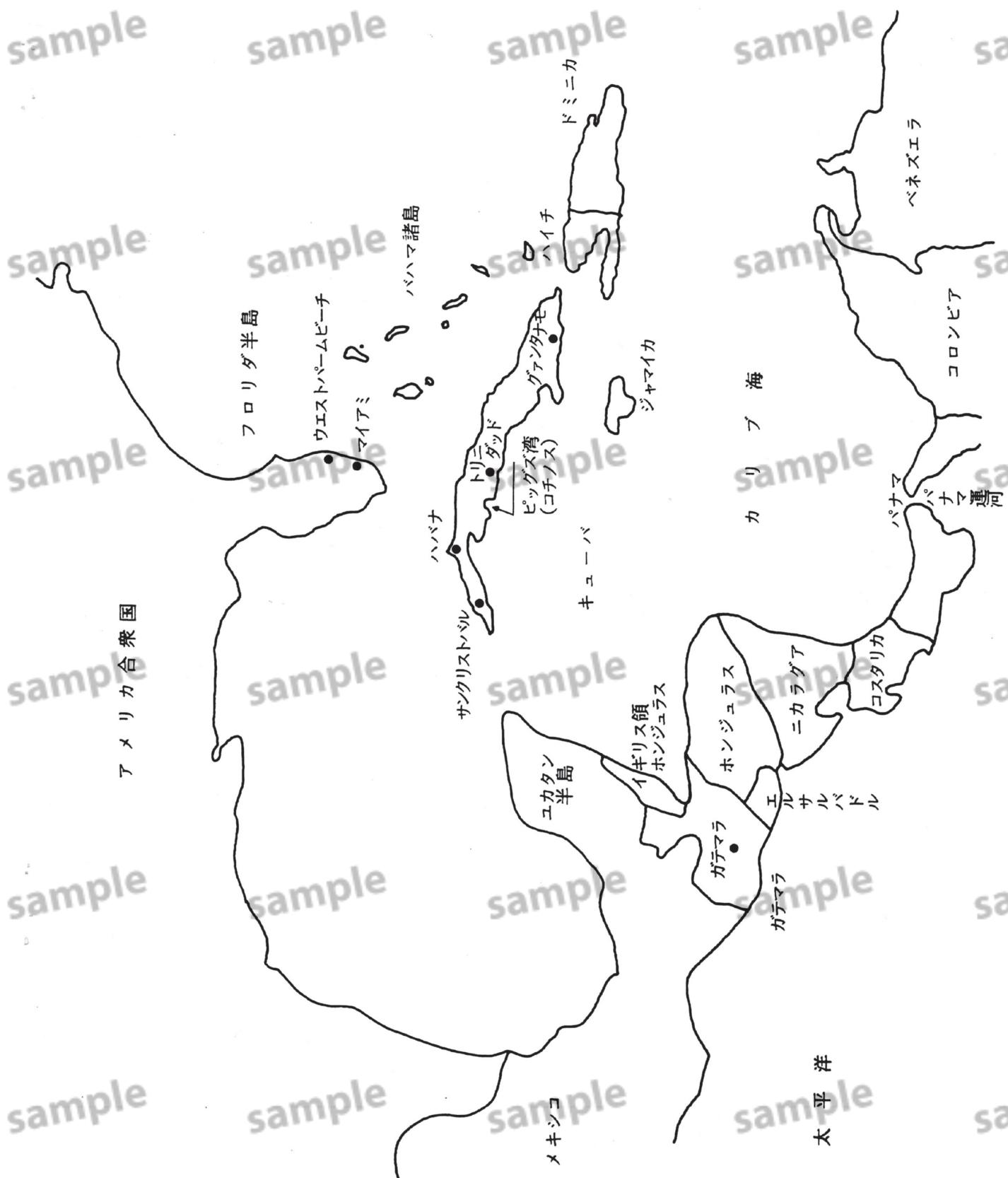
sample

sample

sample

附属資料1

キューバ島の地図



不許複製

慶應義塾大学ビジネス・スクール

共立 2014.1 PDF